女性人権活動奨励賞（やより賞）受賞記念スピーキング・ツアー
正義を求める女性たちの闘い

「戦時性暴力の被害者から　変革の主体へ」

---グアテマラ先住民族女性の声を聞く---

2009 年 12 月

ツ　ア　ー　資　料　集

グアテマラの概要・・・２
グアテマラの歴史・・・３
内戦から１３年・・・６
衣食住・・・８
プロジェクト概要とマリアナさん、アイデーさんの経歴・・・１０
ヨランダさんの講演会（2000 年）を振り返って・・・１２
「虐殺の記憶」－ヨランダさんがまとめた報告の一部－・・・１２
ヨランダさんからのメッセージ・・・１４
日本のグアテマラ支援・・・１５

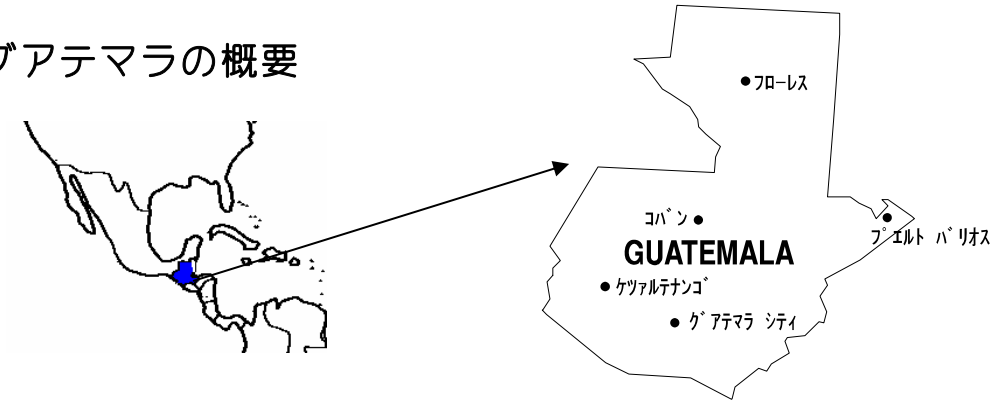
主　　催　“変革の主体”講演実行委員会

事　務　局　日本ラテンアメリカ協力ネットワーク（RECOM）

実行委員会　中南米と交流する京都の会／世界先住民族ネットワーク AINU／WE21 ジャパン
日本ラテンアメリカ協力ネットワーク（RECOM）

協　　力　NPO 法人「女たちの戦争と平和人権基金」／開発と権利のための行動センター
アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」（wam）
日本カトリック正義と平和協議会／先住民族の 10 年市民連絡会／アジア女性資料センター
旧日本軍性奴隷問題の解決を求める全国同時企画・京都実行委

グアテマラの概要



◆面積:10 万9000k㎡（四国と北海道をあわせたよりやや大きい）
◆人口:1368万人(08 年推計)
◆首都:グアテマラ・シティ
◆一人あたりGNI:2450ドル(07 年世銀)
◆通貨:ケツァル(quetzal)約 $ 1=Q7.5
◆宗教:カトリック、プロテスタント、マヤの伝統宗教
◆15 歳以上の識字率:69.1%(非先住民 79.6%、先住民 52.3%)
◆貧困者:貧困率は 51%、極貧率は 15.2%。地域・民族間格差は大きく、農村地域の貧困率は 70.5%、極貧率は 24.4%。先住民族のうち 74.8%は貧困層、27.2%は極貧層に属する。05 年の人間開発指数は中南米でハイチに次いで2番目に低い。
◆平均余命:69.38 才（2006 年予想）
◆5才未満児死亡率:1000 人あたり 45 人(2006 年予想)
◆気候:海岸熱帯地帯は熱帯性、高原地帯は温帯性。雨季と乾期がある。
◆最も高い山:タフムルコ火山 4,211m
◆輸出:コーヒー、砂糖、バナナ、野菜、果物、カルダモンなど
◆地形と土地利用:国土は大きく三つの地域に分けられます。ペテン県を中心とした北部低地、中央から西部にかけて広がる高地、そして太平洋に向けての傾斜地です。北部低地は、人口が少なく熱帯雨林地域ですが破壊が急速に進んでいます。中央部から西部にかけて広がる高地には総人口の半分以上が住んでいます。特に西部高地は先住民族が多く住み、小規模な集落が点在しています。ここでは自給用のトウモロコシをはじめ、小麦やじゃがいも、野菜などの他、モモやリンゴなど日本で見られる野菜を栽培することもできます。近年では輸出用の野菜栽培が急速に広がっています。太平洋への傾斜地域は火山によって作られた肥沃な土地で、コーヒーのプランテーションが行われています。ほとんどは大規模経営で、収穫期には高地から先住民の人々が季節労働者としてやってきます。

グアテマラの歴史

■征服以前■

ティカル遺跡

現在グアテマラが位置する地域には、16世紀にスペイン人に征服される以前は、マヤ文明が栄えていました。古代マヤ文明はだいたい第一期が4－6世紀ごろ、第二期が10－12世紀ごろに開花したといわれています。マヤの遺跡に残されている建築、彫刻、絵画、陶芸などからは、高いレベルの技術が存在していたことが想像されます。

グアテマラ北部ペテン州の熱帯雨林に残るティカル遺跡は、メキシコのパレンケやホンデュラスのコパンなどの遺跡と並び、マヤ文明を代表する遺跡の一つです。しかし10世紀にはいるとこの大都市は突然放棄され、マヤ文明の中心はユカタン半島北部（メキシコ）へ移されました。それがスペイン人によって再び発見されたのは17世紀末のことです。広大なペテン県の熱帯雨林には、まだいくつものマヤの都が発見されずに埋もれていると言われ、最近カンクエンなど大きな遺跡が発掘されています。

■植民地時代■

1521年にアステカ王国（メキシコ）がスペイン人コルテスの軍勢に滅ぼされたのに続き、1524年にはコルテスに派遣されたアルバラードの率いる軍によりマヤ民族は征服されました。都市は破壊され、土地は奪われ、植民地時代が始まりました。高地などスペイン人による植民地化が及ばなかった地域で生き延びた人達もいましたが、征服後の先住民族人口は、スペイン人が持ち込んだ病気、重労働、栄養失調などにより激減しました。

1543年にはグアテマラ総督領の首都がおかれ、グアテマラは中米におけるスペイン植民地の拠点となりました。先住民族の労働力を利用するためにエンコミエンダ制がとられ、本国の王室から一定地域の支配を委託された植民者達が、「先住民族を保護しキリスト教化する」代わりに、租税と労役を徴収することが許されました。この制度は濫用され、先住民族を奴隷化するものでした。

■独立と自由主義改革■

1821年、グアテマラはスペイン本国からの独立を宣言します。しかし、それは幅広い民衆運動の結果というよりも、クリオージョ（植民地生まれのスペイン人）の権益保持のためで、搾取され続ける先住民族の生活に変化をもたらすものではありませんでした。

独立後のグアテマラ経済に大きな変革をもたらしたのは、1871年に発足したフスト・ルフィーノ・バリオス政権により始められた自由主義改革でした。輸出産業としてコーヒーが導入され、大農園が形成されました。その際、先住民族は共有地を奪われ、大農園での奴隷的労働を強いられました。共同体にもとづく先住民族の文化は破壊され、征服当時から続けられてきた少数者への土地集中はさらに加速されました。

20世紀に入ると、輸出産業としてバナナのプランテーションが形成され、ユナイテッド・フルーツ・カンパニー（U.F.C ）に代表される米国の権益が確立されました。これは後に経済的、政治的、そして軍事的にも米国の干渉を許す結果となりました。

■民主的改革■

1944年、若手改革派軍人・都市中産階級・学生などによってホルヘ・ウビコ独裁政権が倒されました。翌年、民主的手続きによって改革派のフアン・ホセ・アルバロが大統領に選出され、グアテマラは民主化の時代を迎えました。次期大統領に選出されたハコボ・アルベンスは1952年に農地改革法を成立させ、小農の創出をめざした土地利用の効率化が進められました。またこの10年間の民主化の時代には、政党や労働組合、農民組合などが結成されており、教会の農村部における活動も行われました。それらの活動は、後の軍事政権に反対する70年代の民衆運動にもつながっていきました。

■弾圧の時代－内戦へ■

アルベンス政権の農地改革は、グアテマラに広大な土地を所有するU.F.C の利益と衝突するものでした。そこで1954年、アルベンス政権を国際共産主義の手先とみなす米国CIA（中央情報局）の支援を受けて、アルマス大佐がクーデターを起こし政権を握りました。以来1985年まで、グアテマラでは軍事政権が続きます。これに対し、1960年には改革派の若手将校が中心となって反政府ゲリラが組織され、内戦が始まりました。

抵抗の共同体

一方、ゲリラとは別に、農村部で土地改革や生活改善を求めて、先住民族が中心となった組織づくりも行われました。しかし、こうした人々もゲリラの仲間と見なされ、70年代末から80年代にかけての政府軍による弾圧・虐殺の対象となりました。1978年のパンソスにおける農民虐殺、1980年の農民組織CUCのメンバーによるスペイン大使館占拠に対する焼き討ちなどを経て、1981年から82年にかけて弾圧はピークに達します。ゲリラをその支持基盤（人々）ごと殲滅する皆殺し作戦「焦土作戦」が軍により展開されたのです。440にのぼる村が焼き払われて地図上から消滅し、住民がむごたらしく殺害されました。このグアテマラの内戦では20万人以上の人々が殺されたり、「失踪」させられたりしたのです。多くの連れ合いを殺された女

性、孤児も生まれました。弾圧を逃れて百万人以上の人々が故郷の村を離れ、都市部や隣国へ、あるいは山の中へと逃れたのです。

弾圧の後、農村部では軍が対ゲリラを名目にほぼすべての男性を「自警団」に組織し、支配しました。そこでは密告の恐怖がはびこり、村人同士の信頼関係が破壊され、自由に集会を行うことすら出来ませんでした。

グアテマラの内戦のもう一つの特徴は、激しい暴力性です。政府軍は拷問や遺体への辱めなどの手法を積極的に用いて、人々のあいだに恐怖心を植えつけました。ゲリラとみなされると、見せしめのために公衆の面前で拷問を加えられたり、遺体に傷をつけられてさらされることもありました。個人に対する迫害を行う一方で、政府軍はゲリラへの参加や支援を行っているとおぼしき共同体を徹底的に攻撃しました。家を焼き討ちにするのみならず、家財道具や宗教・文化的に意味のある象徴物を破壊したり、空爆を行って共同体自体を全滅させることもありました。村に入ると男性と女性を分けて集め、暴力をふるった後に虐殺した上で田畑や家を焼き払うなど、そのやり方はきわめて残虐なものでした。

とりわけ女性に対する性暴力は、もっとも頻繁にふるわれた暴力の一つです。性暴力は、恐怖心をあおり、反乱者を押さえ込むために政府が積極的に用いた戦略でした。それは権力を誇示し誰が支配者であるかを見せつけ、敵を辱めるために行われる場合もあれば、誰かの命を助ける代償として行われることもありました。いずれにせよ、兵士や自警団メンバーにとって強かんは一種のご褒美であり、女性に対する権力行使が鼓舞されたのです。国連真相究明委員会の調査によれば、性暴力の 99%は女性に対するものであり、被害者の 80%は先住民族女性でした。

性暴力が他の暴力と大きく異なるのは、それが被害者である女性の責任にされることです。内戦において多くの女性たちが性暴力の犠牲になったにもかかわらず、被害者は沈黙したままで加害者が罰せられることはありませんでした。また、それを訴えるどころか、悪いことをしたのは彼女であるかのように周囲に見られ、社会の偏見にさらされてきました。尊厳や家族とのきずなを奪われた上、罪の意識や恥ずかしいという気持ちにさいなまれることで二重の苦しみを味わうことになったのです。女性への暴力を容認する風潮は、いまなおグアテマラ社会にはびこっており、女性への暴行や殺害事件が後をたちません。これは内戦期に広範に行われてきた戦略がいかに深い傷を社会に作り出したかを示しています。

■和平交渉■

1986年に民政移管が実現しましたが、軍部の政治に対する影響力は依然として存続し、人権侵害は続きました。「焦土作戦」でゲリラは力を失い、政府軍は軍事的には勝利したと言

えますが、軍による人権侵害が世界に知られるようになると、国際社会はグアテマラ政府を非難し、和平を実現するように圧力をかけ始めました。これにより政府・軍はゲリラ勢力との和平交渉に応じざるを得なくなりました。こうして人権、社会経済、先住民族の権利などテーマ別に11の和平協定が調印され、最終的に1996年12月、グアテマラの内戦は終結したのです。

内戦終結から１３年　―　現在のグアテマラ

1996 年 12 月に内戦が終結してから今年で 13 年になります。和平協定は 11 の協定から構成され、その内容は民主化と人権擁護、先住民族の権利の保障、ガバナンス強化、社会経済的改革など幅広いものでした。

まず、協定の履行状況や人権状況をモニターするための国連和平検証団 MINUGUA（1994-2004）が派遣されたほか、内戦中の人権侵害について国連支援の真相究明委員会の調査（「グアテマラ・沈黙の記憶」1999 年）、それに先立つカトリック教会による真相究明および内戦の傷を癒すための活動「歴史的記憶の回復プロジェクト」（レミー）による調査（「グアテマラ・二度と再び」1998 年）で、36 年に及ぶ内戦がグアテマラの人々と社会のいろいろな分野にどのような被害をもらたしたか、が明らかにされ、このような悲劇を繰り返さないために何をなすべきかの勧告も行われました。

が、この和平協定の履行状態がどうなっているかと見ると、厳しい現状が浮き彫りになります。協定に調印したアルバロ・アルス一大統領以降、いずれの政権も協定の履行を熱心に推進したとは言えません。現在のアルバロ・コロン大統領も 2008 年 1 月に就任してから、目立った政策を行っていません。

2004 年に活動を終えた MINUGUA の最終報告書では、18%の項目が完全履行、58%が一部のみ履行、24%が未履行となっています。成果としては自警団の解体、初等教育の拡大、二言語教育などがあげられるものの、先住民族の権利の保障や土地問題など重要な問題の解決は進展していません。協定履行のためのいくつもの政府機関が作られましたが、そのほとんどは予算がつかない、あるいは汚職で運営が非効率的など、有名無実となっています。

MINUGUA は、履行が進まない理由として、実行性に欠ける政策、不十分な経済成長、伝統的な経済構造が障害となっている、などと指摘しています。徴税率を上げ、軍事費を削減し、社会福祉支出を増額するのが和平協定の精神でした。が、徴税率をとれば、協定の目標値である 12%に達せず、歳入が伸びていません。そのために協定を履行する財源を確保できないという問題があります。協定での軍事費の上限は GDP の 0.66%であるとされているにもかかわらず、その額を突破しており、そのために社会投資、教育や司法関連、和平協定関連支出の予算が削減される結果となっています。つまり、グアテマラの人々にとって、日々の生活の変化はごくわずかであり、先住民族は社会的にも最も低い階層におかれ続けています。

現在のグアテマラの人々、特に先住民族が直面している問題は次のようなものです。

先住民族の権利:「先住民族の権利とアイデンティティーに関する協定」締結からはすでに14年がたっていますが、先住民族の権利は十分に守られておらず、差別撤廃のための取り組みも遅々としており、政府には問題を解決しようという積極的な意志がみられません。

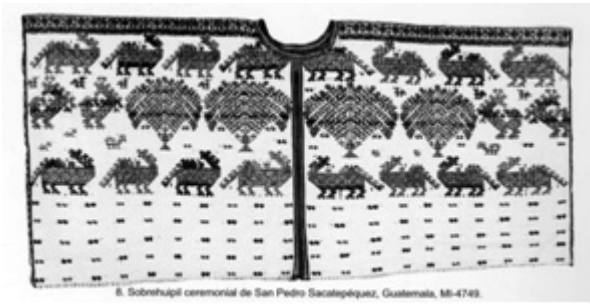
鉱山開発問題:ここ数年、カナダや米国の鉱山会社がグアテマラで金やニッケルなどを採掘しています。これらの鉱山は先住民族の居住地域にあり、先住民族コミュニティの反対を無視した形でグアテマラ政府が採掘権を譲渡しています。グアテマラ政府は、先住民族の土地での開発については先住民族の同意を得なければならないと定めているILO169 号条約も批准していますが、これを無視しています。これらの鉱山開発により、先住民族にとって神聖な意味を持つ彼らの土地を汚すだけではなく、環境も破壊されます。

土地問題:和平協定により「農地銀行」が設立され、土地を持たない農民に土地購入資金を融資する制度ができました。しかし、適正に土地価格を決定するメカニズムも社会的基盤もないところで、大土地所有者に有利な不透明な価格設定や汚職の問題、農業不適地の購入と売却、土地購入後の融資や技術支援の欠如、などから、農民の土地へのアクセスを確保するという政策は破綻しています。農民の生活基盤の安定のために、新しい農業政策、農地政策が必要とされています。

食糧危機:2001 年のコーヒー価格の暴落によってコーヒー危機が起こり、プランテーションでの労働で生計を立てている人々が深刻な影響を受けました。2005 年 10 月にはハリケーン・スタンがグアテマラを襲い、サンティアゴ・アティトランをはじめ多くの地域で土砂崩れ、川の氾濫が起こり、人命が失われただけではなく、住居が破壊されたり、農作物が失われたほか、橋や道路などのインフラにも大きな被害が出ました。もともと貧しい農村部の大多数の人々は、もとより蓄えもなく、農作物がやられれば、たちまちその日から食べるものがなくなります。ハリケーンだけでなく、ここ数年は異常気象が続き、異例の寒さになったり、雨が多かったり、と農作物に影響が出ています。また、石油価格の上昇などで物価も上がっており、ますます人々の生活を圧迫しています。

治安の悪化と不処罰:組織犯罪はほとんどの場合、麻薬密輸・軍関係者と一体になっており、グアテマラの場合は政府諸機関や警察にも入り込んで、影響力を及ぼしていると言われています。犯罪が起こっても、それが調査され責任者の処罰まで行き着くケースは多くありません。警察や検察、司法が機能していないのです。また、グアテマラでは教育の機会が少なく、そしてよい条件で仕事を得る機会がないために、農村部や都市部貧困層の多くの若者がマラスと呼ばれる暴力組織に取り込まれるなど、大きな社会問題になっています。

衣食住


8. Sobrehuipil ceremonial de San Pedro Sacatepéquez, Guatemala, MI-4749.

■　衣　■

先住民族の男性は、村の外へ出ることが多いため、あまり伝統衣装を身に付けなくなりました。しかし、女性は自分や娘の衣装を織り、娘たちに織りを教え、その美しい伝統衣装を誇り高く継承しています。色や柄などは村ごとに異なり、衣装を見ればその人の住む村がわかりますが、種類は何百にも上ります。また、一つ一つの色や柄には地域の生活や信仰に根付いた意味があります。

基本的な形としては、「ウィピル」＝写真上＝と呼ばれる色彩豊かな織りや刺繍のブラウスと、「コルテ」という巻きスカートを、「ファハ」でベルトのように支え、頭には「シンタ」=写真下＝という紐の飾りを巻きつけます。他に「スーテ」という四角い織り布や「ペラヘ」というショールを身に付けることもあります。どちらも、赤ちゃんを背負うためや、祈りの場で頭を覆うためにも使いますし、公式の場で「ペラヘ」を左肩にたらす地域もあります。布の使い方や赤ちゃんのおぶり方も地域によって様々です。

■　食　■

●トウモロコシ

「トウモロコシ（イムシ）」は、グアテマラの人々の食の基本です。色も白、黄色、黒、赤とあり、この 4 色はマヤの人々の信仰において東西南北を示しています。

主食である「トルティージャ（レフ）」は、まず乾燥させたトウモロコシを一晩石灰水につけたあと、そのまま茹でて挽き、手でせんべい状にしたものを、石灰を塗ったコマル（丸い鉄板）の上で焼いて作ります。トウモロコシはその他に、ゆでて挽いたものをお湯にといた「アトル」という飲み物や、練り粉（マサ）に肉などを入れてバナナの葉やトウモロコシの皮で包んで蒸した「タマル」や「チュチイト」などの原料にもなります。

このようにトウモロコシは、マヤの人々の食生活に欠かせません。また、マヤの人々の間では、最初の人間はトウモロコシで作られたと伝えられており、神聖な意味もあるのです。

●豆（フリホレス）

トルティージャとともに食事に欠かせないのがフリホレスと呼ばれるインゲン豆で、トウモロコシ畑の中に一緒に植えます。黒いものから小豆色、白まで種類はさまざまです。多くはシンプルに茹でて塩味で食べます。あれば香草なども入れます。

●野菜
ニンジンやジャガイモ、トマトなど日本でも一般的な野菜の他、ウイスキル（大和瓜）、アボガド、唐辛子などもよく食卓にのぼる野菜です。ウイスキルは実だけではなく、葉や根もスープにします。

●コーヒー
日本でも「ガテマラ」や「アンティグア」などという名称でグアテマラ産のコーヒー豆が売られていますが、コーヒーはグアテマラの主要な輸出品です。経済状況が許す限り、食事とともにコーヒーを飲みますが、日本のように濃くいれる習慣はなく、ごく薄いコーヒーに砂糖を入れて飲みます。寒い山岳部のイシル地方のように、唐辛子を入れて辛くして飲むところもあります。

■　住　■
山岳部の農村に住む先住民族の住居は、ほとんどが一部屋か二部屋の質素なつくりです。トタンは高価とされ、ほとんどの屋根が瓦葺きで、場所によっては萱（かや）に似た植物や椰子の葉で葺いた屋根も見られます。壁にはアドベ（日干し煉瓦）か板、トウモロコシの茎などを使います。床は土間になっていて、煮炊きはその土間を少し掘って石で囲んだいろりで行います。トイレは家から離れた畑の中などに設置。ベッドのない家も多く、その場合は土間にペタテと呼ばれるゴザを敷き、毛布やスーテで身を包んで寝ています。

★テマスカル★
日干し煉瓦で作ったおよそ直径 1.5m のかまどの形をした蒸し風呂で、冬に寒くなる地域で使われています。外から薪で燃やして中の空気を温めます。入口は人一人がかがんで入れる大きさですが、中は3人ぐらいが座れます。中に入るとお湯で体を洗い、熱くなった石に水をかけて蒸気を出します。お湯に薬草を入れたり、床に香りの草を敷き詰める場合もあります。女性たちが産前・産後にテマスカルに入って身体を温める他、薬草とあわせて治療のためにも使われます。重労働や精神的負担で疲れ切ったコナビグアの女性たちの中には、田舎に帰ったときテマスカルに入ると日頃の疲れがとれ楽になるという人も多くいます。

●マリンバ
グアテマラのお祭りに欠かせないのがマリンバと呼ばれる木琴です。音域が広く、通常 3 人で一台のマリンバを演奏します。お祭りではマリンバに合わせて村人が踊ります。

●マヤ暦とナワル
　古代マヤ民族の人々は天体観測に優れ、非常に精密な暦を持っていました。260 日周期と 365 日周期を組み合わせ、これが 52 年ほどで一巡します。さらに 20 日、360 日、7200 日、144000 日などで構成される長周期のカレンダーもあります。
　ナワル（守護霊的動物）は、子どもが生まれたとき、マヤ暦にもとづいて決まります。これにより一人一人の性格や運勢がわかる、とされています。子どもが生まれると、マヤの司祭が両親にその子どものナワルを伝え、子どもの性格や将来どのようなことに注意しなければならないかなどの助言を行います。また、病気や人生の問題に直面したときなどに司祭に相談すると、司祭はその人のナワルに基づいて助言をします。

「戦時性暴力の被害者から変革の主体へ」プロジェクトとは

2000 年に東京で開催された女性国際戦犯法廷の国際公聴会に出席し、証言したヨランダ・アギラルさんが、そこでの経験と「慰安婦」たちの勇気に励まされて始めたプロジェクトです。アギラルさんの呼びかけに応えた個人と組織が集まって準備を始め、2002 年に 3 つの県（ウエウエテナンゴ、チマルナンゴ、アルタ・ベラパス）から 60 人の女性の参加を得て、「戦時性暴力の被害者から変革の主体へ」プロジェクトとして活動を開始しました。

現在は、上記 3 県にイサバル県が加わり、4 つの県で 100 人の先住民族女性が参加しています。運営は、グアテマラ全国女性連合（UNAMG）と社会心理行動と共同体研究グループ（ECAP)という 2 つの NGO によって共同で行われています。UNAMG はグアテマラの女性の地位向上を目指して 1980 年に設立された団体です。軍政下に弾圧を受けて一時事務局の亡命を余儀なくされましたが、現在にいたるまで一貫して女性の権利のための活動を続けています。一方 ECAP は内戦期にさまざまな形で被害を受けた人々の心理サポートを目的として 1994 年に設立されました。被害者に寄り添うこと、彼らの視線による歴史の記憶回復を活動の中心に据え、拷問の犠牲者や家族をなくした人々に対する支援、秘密墓地発掘の支援などを行っています。この二つの団体がそれぞれの専門知識や方法論を持ち寄っています。

プロジェクトの活動は主に以下の 4 つから成り立っています。

一つは、被害者がお互いの体験を共有する場を作ることです。各地で互助グループを作りましたが、そのためにまずその活動を支えるプロモーターの育成を行いました。女性たちが集まり話し合える場を作り、そこで、経験を共有し、自分たちに向けられた暴力の原因を考え、トラウマにどう立ち向かうかを話し合います。プロモータが連絡役を務め、月に一回グループのミーティングを行います。その他にプロモーターによる戸別訪問も行います。ミーティングを通じて起こったことをグアテマラの社会、経済、政治的コンテクストのなかで見直すことで、自分だけに起こったことではないことや、それが軍事的な戦略の一部であったこと、戦時であるか否かにかかわらず女性蔑視の価値観により女性への暴力が起こること、などを認識するようになりました。また、自分の価値を認め、尊厳を取

り戻し、そして女性としての権利を皆で守る必要があるという方向に、活動が広がりつつあります。年に一回、これら各地域の女性たちが一堂に会し、交流する「戦時性暴力の被害女性全国集会」も開催するようになりました。

性的被害を受けた女性の 80%は、拘束や拷問、家族の虐殺など、ほかの被害も受けており、深いトラウマをかかえています。その彼女たちが声を上げ、自らの人生を取り戻すことが、何よりも重要です。そのため、互助グループの集まりでは、メンタルヘルス、アートセラピーなどを組み合わせたワークショップを行っています。

2 つ目はこの活動を広めることです。ラジオやデモ行進への参加などさまざまな形で、性暴力がなぜ起こるのか、それが女性たちにどのようなトラウマを引き起こすのかについての意識を高めるキャンペーンを行っています。11 月 25 日は「国際女性への暴力撤廃の日」ですが、毎年この日には他の女性団体と共にデモ行進やイベントなどを行います。また、女性たちの体験を演劇にして上演したり、壁画を描くなどの表現活動を行います。『沈黙を破って : 戦時性暴力の被害者に正義を』という本も出版しました。

3 つ目は補償です。これら女性たちが受けた暴力・被害を可視化し、それを補償につなげることも重要です。被害者のほとんどは、その後なんらの救済措置もなく貧困におかれたままです。現在グアテマラ政府によって内戦の被害者への補償を部分的に行う国家補償プログラムが進められています。この「暴力の被害」に性暴力の被害を含めるよう関係諸機関に働きかけ、法制化のための活動も行っています。そして性暴力被害者も補償の対象になるように取り組んでいます。またプロモーターを通じて補償のために必要な手続きの情報提供や、付き添いなどを行ってきました。

そして最後は、内戦時に行われた女性に対する性暴力を広く社会に告発する「民衆法廷」を開催することです。これまでにその準備を進めてきましたが、来年開催の運びとなりました。法廷では、被害者の女性たちが証言し、人権専門家、国連と米州人権委員会の女性への暴力に関する特別報告官などを招いて行われます。

【経歴】

マリアナ・チュタさん

1963 年、チマルテナンゴ県サンホセ・ポアキル郡サキタカハで生まれる。現在 46 歳。1979 年 15 歳の時結婚して同ポアキルにあるパナヤに移る。当時、教会系の団体や外国 NGO による農村開発支援のプロジェクトなども行われ、マリアナさんは積極的に参加する。人権団体による先住民族の権利講座などにも参加した。その頃から軍の弾圧が激しくなる。村の中で行方不明者が出始めた。結婚して 4 年目 19 歳の時、プランテーションに出稼ぎに行ってしばらく家を留守にしていたのをゲリラに入ったからと疑われ、夫が軍に連れ去られる。夫を探して軍の駐屯地に出かけるが、追い返される。夫は以降行方不明のまま。その時マリアナさんは 3 歳と 1 歳の娘、そしておなかに赤ちゃんがいた。その後は、3 人の娘を養うために必死で働く。他の寡婦とともに、教会や外国 NGO などの支援を得て、女性の協同組合を作りそれに参加する。5 年間保健プロモーターの講座を受講した。2000 年にその資格を取った時に、17 歳の娘が自殺するというつらい経験も持つ。

マリアナさんより：

その後 UNAMG と ECAP のプロジェクトに参加するようになりました。それまでは、一緒に働いていた女性たちも何らかの形で内戦の被害を受けていましたが、それぞれの状況が違うので、自分に起こったことを話しあうことなどなかったのです。でも「変革の主体」プロジェクトでは、皆軍に強かんされた経験を持っていて、ここでは自分たちに起こったことを話しあえます。それまでは私だけのことだと思っていました。他の人にはとても話せない、と。そんなことをしたら噂されたり、批判されたり、笑われたりするのではないかと思ったのです。でも、このプロジェクトでは、私たちは姉妹のように仲良くなり、信頼し合うことができました。メンタルヘルスや他のワークショップに参加できることができて本当に嬉しく思っています。

アイデー・ロペスさん

ウエウエテナンゴ県サンアントニオ・ウイスタの出身。31 歳。心理学者。生まれてすぐに亡命を余儀なくされた家族とともにメキシコに渡り、そこで 18 年の亡命生活送を送る。メキシコ時代から NGO グアテマラ人権コミッション（ＣＤＨＧ）の活動に参加し、グアテマラにおける人権侵害の告発や女性グループを対象にした人権ワークショップなどの活動を行った。グアテマラに戻ったのは内戦が終結する 1996 年。2004 年より ECAP の仕事を始める。ウエウエテナンゴ県での秘密墓地の発掘同行などを経て、「変革の主体」プロジェクトのメンタルヘルス担当に。チマルテナンゴでの活動の後、現在はアルタ・ベラパス県とイサバル県（ケクチ語地域）で 3 つのグループ 60 人の女性とメンタルヘルスのセッションを行っている。3 歳の娘を持つシングルマザー。

ヨランダさんの講演会（2000 年）を振り返って

ヨランダさんは 15 歳の時に労働運動のチラシを配っていて警察に拉致され、拘束されて暴力を受けた。その後、メキシコなどへの亡命を経て 93 年にグアテマラに帰国し、ジェンダー問題で活動。レミー報告書で女性に対する暴力を分析して「女性の章」を執筆したほか、国連真相究明委員会のアドバイザー、人権擁護官事務所での初の女性の権利擁護チーム設立などで活躍。国連グアテマラ人権検証団のアドバイザーも務めた。

00 年 12 月に日本で開催された国際女性戦犯法廷中の国際公聴会のため来日した際の講演では、①戦時下の女性への暴力は極端な形であらわれるが、戦時下だけの問題ではなく日常の暴力の延長であり、日常の暴力をなくす努力が必要②女性への性暴力は社会の中で「見えない問題」になっているが、「見える問題」にしなければいけない③被害者の苦しみは限りなく、消え去るものではないが、被害者の立場に閉じ込められるべきではない。苦しみを人生そのものにせず、自らが人生の主体だと認識する④周囲は被害者の話を聞いて受け止め、暴力が再び起こらないよう、それぞれの場所、立場でできることを始める……と語った。

また、東ティモールから参加した被害女性は、当初は本当につらそうで声も細く、他人の視線を避けて付き添いの人の陰に隠れるようにしていたが、ヨランダさんと一緒に過ごすうちに勇気づけられ、公聴会当日は力強く証言。ヨランダさんが講演で述べたことだが、被害者にとって語ること、そしてそれを受け止めてもらうことがどれほど重要かが改めて示される形となった。

「グアテマラ　虐殺の記憶　真実と和解を求めて（岩波書店）」より

－ヨランダさんがまとめた報告の一部－

第Ⅲ部「二度と再び」第2章「尊厳を取り戻す女性たち」 1「女性への暴力」（203～206 頁）

この章では、女性たちの歴史的な記憶を回復しようと試みている。レミーに寄せられた証言の半数は女性によるものである。彼女たちは証言のなかで、暴力の経験や、家族や共同体の状況については語っているが、女性であるがために受けた暴力についてはそれほど具体的に語っていない。そこで、女性の人生に暴力がどのような衝撃を与えたか、女性たちの社会的参加や役割がどのようなものだったかを分析するため、重要証言である数人の女性に再度インタビューするとともに、弾圧の被害が最もひどかった地域での集団インタビューを追加した。

【1】女性への暴力

（1）被害者としての女性

＜台所と部屋の間に別の娘がいました、年のころは 23 歳くらいでしょうか、首のここのところを三ケ所斬りつけられていました。まだ乳呑み子の赤ん坊も殺されていました。赤ん坊に乳をやりながら死んでいたのです。（証言 1871　加害者　1981 年）＞

暴力は、男だけではなく、女、子ども、老人にも大きな苦しみを与えた。証言で明らかになった被害者のほとんどは男性であるが、内戦中には女性に対するさまざまな暴力も繰り広げられた。そして生き残った女たちは、過酷な条件のなかで暴力の結果を生きなければならなかった。

（2）私たちは動物以下の扱いを受けた
暴力が極限に達すると、人間性を失った加害者は、相手が人間であることを無視していたぶり、ついには嘲笑するにまで至った。

＜そいつらは皆殺しだ、と言いました。兵士たちはどうやって楽しもうか、と、殺すつもりの捕虜をそこに連れ込んだのです。女も男も、兵士もいました。笑い声が聞こえたので、どうしたのかと行ってみると、そこでは捕虜の男たちに女を捕まえるように、つまり、セックスをしろと命令していたのです。それを見て兵士たちが笑っていたのでした。かわいそうに、そうでしょう、捕虜たちは腹を空かせきっていたし、眠ってもいなかった、ふらふらだったのに、その上そんなことをさせたのです。（重要証言 027　加害者　1982 年）＞

（3）母親を利用する
子どもを対象とする拷問や殺害は、母親の愛情を利用して女性を操作し、支配し、辱めるという、恐ろしい心理的拷問の道具であった。

＜兵士らはマチェーテ（注＊）でうちの息子の首を斬り取り、その後で下の息子の首も斬り落としたのです。（証言 10581　アルタ・ベラパス県チセク　1982 年）＞

特に戦慄を覚えるのは、妊婦とその腹の中の胎児にまで加えられた暴力である。このような暴力は至るところで繰り返し行われ、生命の源までも殺し尽くそうという、民間人に対する軍の残虐性をはっきりと表している。

＜身ごもっている女たちの、そのうちのひとりは 8 カ月の身重でしたが、そのお腹を引き裂き、赤ん坊を取り出し、それをボール代わりに蹴って遊んだのです。それから女の片方の乳房を切り取って木に吊るしました。（証言 6335　ウエウエテナンゴ県バリージャス　1981 年）＞

（4）加害者のために料理し、踊る
女たちは恐怖と暴力の日常を生きなければならなかった。殺戮を目の当たりにし、そしておそらくは確実に彼女たちを待ち構えている死を前にして、食事を運んだり、料理をしたり、踊ったり、行進することを強制されたが、これらは心理的な拷問にほかならなかった。女たちを愚弄し辱めることは、殺し屋たちがとり行う儀式と化した。

＜軍が来てこう言ったのです。「お前たちを殺さないでもいいのだ、だがそれぞれ鶏を一羽ずつ持ってこなければならない。男は 12 人で、お前たちも 12 人、だから昼めしに持ってこなければならばいのも 12 羽だ」。女たちはすぐに家から鶏を持ってきました。そして虐殺が始まったのです。もし息子がPAC（注＊）の務めを果たしていて、父親は果たしていなかったなら、息子が父親を殺す。もし息子が果たしていないなら、父親が息子を殺すために手を汚さなければならないのです。土鍋が火にかけられ。12 羽の鶏がそこに放り込まれました。兵士たちはうまい料理を作れと命令し、12 人の男を拷問して殺した後、ガソリンをかけて死体を焼き、それが済むと、拍手をして食事を始めました。（証言 2811　キチェ県チニケ　1982 年　＞

【女性の虐殺】証言の中には、女と子どもだけが殺された虐殺事件も含まれている。いずれも村に男たちがいなかった場合か、男はすでに全員殺されてしまっていた場合であった。1982年、バハ・ベラパス県ラビナルのリオ・ネグロ村とパコショム村で軍とショコックのPACが起こした虐殺では、150 人から 176 人が殺害された（証言 543、2026）。加害者は朝 6 時にリオ・ネグロにやってきたが、村には（これに先立つ虐殺の折に男は殺されており）ほとんど女と子ども、老人しか残っていなかった。軍とPACは全員を家から駆り出すと、小学校に集めた。女たちには兵士のために食事を作るよう命じ、それからパコショムに連れて行くと、PAC団員や兵士たちと踊らせ、若い娘から強姦した。そして女から殺し始めた。子どもも殺されたが数人は命を救われて引き取られた。何人かの女性と子どもは逃げることができた。

注）＊マチェーテ　山刀のこと。
＊PAC　内戦中軍によって組織された自警団のこと。村の男性を強制的に集め、村内の監視や軍の手先として使われた。PACに参加しない男性はゲリラとみなされ殺された。

やより賞受賞へのメッセージ

戦争による破壊をこうむったすべての社会は民族の歴史を再建しなければなりませんでした。再びそのような事が起こらないようにその記憶を心に刻み、とりわけ女性の身に起こったことに関して、その心と正義を回復するプロセスを推進することが必要でした。

この努力は日本とグアテマラの人々の心を強く結び付けています。私は2000年12月に東京で開催された「慰安婦」たちに正義と尊厳を取り戻すための「女性国際戦犯法廷」に参加しました。そこで、気がついたのです。どんなに時間が経っていようともその時起こったことを告発しなければならない、グアテマラでも女性に対するひどい暴力が行われたのだという事を世界に向かって叫ばなくてはいけないのだ、そして、無数の女性が性的暴力にさらされ、40年近く続いた内戦を生き抜いてきた女性もたくさんいるのだ、と。

こうして、「変革の主体」プロジェクトが立ち上がりました。何年もかけて調査し、女性たちが自分の身に起こったことに言葉を与え、自分自身の身体に向き合い、心の傷を癒し、性的暴力を告発し、社会心理的な活動に取り組んで、正義と尊厳を取り戻すための共同プロセスを推進してきたのです。

今日、「変革の主体」プロジェクトがやより賞をいただくことになりました。100人以上の女性たちが、自分の身に起こった事を語り、さらに前進しようとしています。この女性たちが経験した事が黙殺される事は二度とないでしょう。なぜなら、最近グアテマラでは女性への暴力を犯罪とする法律が制定されたからです。女性たちは自分自身の声を持ち、自分の人生とコミュニティの主人公として立ち上がったのです。そして今日、かつて「慰安婦」たちの力で生まれたものが、グアテマラでの努力に力を与えて、また日本へと戻ってきたのです。

「変革の主体」プロジェクトへの連帯に感謝します。今皆さんの前にいる二人の女性は、自分の肉体と人生を脅かした性暴力が何であったのかを、ついに語り始めた多くの女性たちの声を携えてきています。今日、私たちの声はここでひとつになり、かつて隠されていた事実がもう二度と隠されることはないということを、世界に訴えます。

ヨランダ・アギラル（「変革の主体」プロジェクト創始者）

日本のグアテマラ支援について（外務省ホームページなどからまとめ）

外務省ホームページの 07 年度版国別データブックは、グアテマラには 6 つの構造的な問題があると指摘する。具体的には次のとおりだ。①国内の各勢力の分裂・対立（先住民と非先住民、農村と都市部）②内戦の後遺症（人間不信、国家や政府・治安当局不信）③人権問題④ガバナンスの欠如⑤汚職問題⑥先住民問題、とする。04 年の人間開発指数は中米 5 カ国中最下位で、富の偏在が著しく、貧富の格差が極めて大きい。

和平協定については、履行期限は 2000 年度末までだったが、諸協定のうち、特に「先住民のアイデンティティー及び諸権利に係る協定」の進捗が大幅に遅れ、履行期限は 04 年度末まで延長された。しかし、08 年 6 月の時点でも、完全履行の目処は立っていない。

日本はグアテマラへの ODA の意義について、①長年にわたり日本と友好的な外交関係があり、国連の安保理改革などで日本の立場に支持を表明している②和平の定着、先住民と非先住民、地方の農村部と都市部の間の格差是正を日本が支援することは ODA 大綱の重点課題である③グアテマラを含む中米は北南米を結ぶ地理的・戦略的な位置を占め、地域の安定と発展は国際社会にも重要。人口も 4700 万人強あり、日本にとって一層重要なパートナーとなり得る。その中米 5 カ国で人口と GNI が最大のグアテマラには、中米の地域統合、経済発展に向けた強いリーダーシップを期待できる、としている。

以上から日本は、教育、保健・医療及び農業の普及・改善、インフラの整備、治安の改善について技術協力及び草の根・人間の安全保障無償資金協力を中心をすることがグアテマラへの ODA の基本方針としている。06 年 7 月にはグアテマラ政府と現地 ODA 政策協議を行い、最重要点分野を「農村開発」、開発課題を「地方生活の改善」とし、「持続的経済開発」「民主化の定着」を継続して重点分野とすることで合意。07 年 7 月にはグアテマラ外務省、大統領府企画庁、財務省との間で実務者間レベルの対グアテマラ経済協力方針会議を開き、その踏襲を確認している。

日本は 95～00 年の 6 年間、グアテマラへの援助額が米国を上回る第 1 位だった。だが、01 年に米国と逆転して 2 位となり、05 年にはスペイン、米国に次ぐ 3 位となっている。07 年度の ODA 実績は無償資金協力 3.43 億円、技術協力 8.60 億円。07 年度までの援助実績は、円借款 268.36 億円、無償資金協力 402.05 億円、技術協力 239.58 億円。

グアテマラに対しては主要ドナー8 カ国（日本、米国、オランダ、独、スペイン、カナダ、スウェーデン、ノルウェー）と主要国機関（UNDP、IMF、世銀、IDB、EU など）が「G13」と呼ばれるドナーグループを構成。半年ごとに持ち回り制の議長で、日本は 06 年 4 月から 6 ヶ月間務めた。

なお、民主化や和平に直接関わる支援は次のページのとおり。

別紙

1. 民主化・復興開発、並びにガバナビリティ及び司法強化のための支援

No.	案件名	年度	適用スキーム	供与額（ドル換算額）
1	民主化支援（総選挙）（OAS 経由）	1995	緊急無償	10.00 百万円（0.10 百万ドル）
2	復興開発支援（UNDP 経由）（帰還民・国内避難民への緊急支援、身分特定調査、再定住のための土地取得及び所有権の合法化）	1996		237.00 百万円（2.44 百万ドル）
3	司法制度近代化計画（世銀経由（開発政策・人材育成基金））		国際機関を通じた援助	80.51 百万円（0.83 百万ドル）
4	グアテマラ難民支援計画（国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）経由）	1997		64.20 百万円（0.60 百万ドル）
5		1998		53.10 百万円（0.45 百万ドル）
6	復興開発支援（UNDP 経由）		緊急無償	88.50 百万円（0.75 百万ドル）
7	土地基金（FONTIERRAS）支援（土地購入による国内避難民の再定住支援）（UNDP 経由）		国際機関を通じた援助	94.40 百万円（0.80 百万ドル）
8	地雷犠牲者支援プロジェクト（UNICEF 経由）	1999		24.00 百万円（0.20 百万ドル）
9	先住民慣習法と地方自治に関する研究・教育研究		草の根・人間の安全保障無償	6.00 百万円（0.05 百万ドル）
10	大統領決選投票における市民参加キャンペーン計画（対 TSE）			9.96 百万円（0.08 百万ドル）
11	民主化支援（総選挙）（OAS 経由）		緊急無償	7.20 百万円（0.06 百万ドル）
12	国家文民警察学校機材整備計画	2002	一般プロジェクト無償	189.00 百万円（1.55 百万ドル）
13	民主化支援（総選挙）（OAS 経由）	2003	緊急無償	10.98 百万円（0.09 百万ドル）
14	マヤ先住民に対する選挙情報普及計画（対 TSE）		草の根・人間の安全保障無償	9.93 百万円（0.08 百万ドル）
15	自覚ある投票のための市民キャンペーン計画（リゴベルタ・メンチュー・トゥム財団）			5.29 百万円（0.04 百万ドル）
16	人権擁護のための無線通信網整備計画（対 PDH）			9.18 百万円（0.08 百万ドル）
17	中米 3 ヶ国における貧困・未成年女性支援（UNIFEM 及び UNOPS 経由）	2005	国際機関を通じた援助	164.99 百万円（1.54 百万ドル）
18	熱帯低気圧スタン災害復興支援計画	2006	防災・災害復興支援無償	834.00 百万円（7.51 百万ドル）
19	2007 年 9 月 9 日実施の総選挙における選挙監視支援プロジェクト（対 OAS）	2007	草の根・人間の安全保障無	9.96 百万円（0.09 百万ドル）

日本ラテンアメリカ協力ネットワーク（レコム）

Red de Cooperación Mutua entre Japón y America Latina　(RECOM)

日本ラテンアメリカ協力ネットワーク(レコム)は、中南米、カリブ地域において社会的、経済的に困難な状況におかれている人々、そしてそれをはねかえすために運動をしている人々とのネットワークを築き、相互理解を深めると共に、直接あるいは間接的に支援活動を行うことを目的としています。同時に活動の中で、自分たちの生きる「日本」という社会と世界を見つめ直すことにより、新たな価値観、社会を構築していくことの重要性も忘れることはできないと考えています。

1992 年に設立されてからこれまで、ラテンアメリカ・カリブの人々に対し、直接・間接に支援活動を展開してきました。特に中米グアテマラに対しては、レコム設立当初から、日本の人々にグアテマラの現状を伝えるスピーキング・ツアー、現地の政府当局などに人権擁護を訴えるはがきキャンペーン、意見広告、コミュニティ強化のための研修事業、地域住民参加型の持続的開発プロジェクトなどの協力を続けてきています。

■レコムの活動■

1. 人々の活動を伝えるために

中南米情報誌「そんりさ」の発行：年に6回の発行で、ラテンアメリカのニュースや時事分析をビビットに伝えます。音楽や映画評、イベント情報なども盛り込まれています。

スピーキング・ツアーや講演会の開催　他の団体とも協力して、ラテンアメリカの民衆運動のリーダーや人権活動家などを日本に招き、各地で講演してもらうスピーキング・ツアーを行います。これまでグアテマラからは、先住民族女性組織コナビグア（連れあいを奪われた女性たちの会）、先住民族農民組織コニック（グアテマラ先住民族農民全国調整委員会）、先住民族人権擁護組織デフェンソリア・マヤ（マヤの権利を守る会）の代表ら、環境保全に取り組むサンティアゴ・アティトランの市長などを、またニカラグアからも女性組織代表やカリブ自治地域大学学長・副学長、ハイチの人権活動家など、多数のスピーカーをお迎えしました。

WEB ページの公開　http://www.jca.apc.org/recom/

公開講座の開催

資料集発行　グアテマラやニカラグアに関する資料集を発行しています。

2. 現地を知るために

スタディツアー「人々と出会う旅」の実施など。これまでにグアテマラやニカラグアなど多数の「旅」を実施しました。

3. つながりを広く深くするために

国内外で関心を抱く人々のネットワークづくり・強化を行っています。

4. 支えるために

人権状況の改善を求める活動：グアテマラの人権状況を国際社会が監視していることを示すため、現地新聞に意見広告を掲載したり、グアテマラ政府への抗議ハガキの送付などを行っています。

災害などの緊急支援： 1998 年にハリケーン・ミッチで大被害が出たニカラグアに、2005 年にはハリケーン・スタン被害を受けたグアテマラに、緊急支援を送りました。
民衆運動の支援： 前述のコナビグアやコニックなどを支援しています。ニカラグアでは、大西洋岸自治地域における自治プロセス支援の一環として、地域自治大学の支援を行いました。
プロジェクト支援： グアテマラ・イサバル県での農業技術普及チームや、アティトラン湖の環境プロジェクト、女性参加のための研修プロジェクトなどを支援してきました。

こうした活動はレコム会員の「意志」と「参加」によって支えられています。皆さんがそれぞれの生きる場所から、それぞれのスタイルで中南米、そしてカリブの人々とつながってくれることを期待します。

まずはここから・・・
1. レコムの活動に参加してみよう！
会報誌「そんりさ」の発送作業を 2 ヶ月に1回、関西や東京で行っています。新しい出会いと終了後の交流を楽しみませんか？ラテンアメリカ関連の書籍・ビデオも豊富に集めており、閲覧が可能です。（貸出は会員のみ）
2. 会員（もしくはそんりさ購読者）になろう！
3. 寄付をしよう！（当会運営資金のカンパ、グアテマラ基金への寄付）
4. 人々と出会う旅へ参加してみよう！

そして、ラテンアメリカの現地で自らプロジェクトを立ち上げることもできるかもしれません！

会員・購読者　募集
★会員　年 8,000 円（学生 5,000 円）　会の運営、総会での投票、「そんりさ」購読、資料閲覧・貸出
★賛助会員　年 1 万円（一口）　総会への参加、「そんりさ」購読、資料閲覧・貸出
★「そんりさ」購読会員　年 4,000 円　「そんりさ」購読、資料閲覧・貸出

運営費のカンパ、会費の振り込みはこちらまで
★郵便振替口座　00110－7－567396　日本ラテンアメリカ協力ネットワーク

レコムが支援するグアテマラの団体への支援をお願いします（全額グアテマラ支援に使われます）
★郵便振替口座　00100－6－664427　グアテマラ基金

日本ラテンアメリカ協力ネットワーク（レコム）
Red de Cooperación Mutua entre Japón y America Latina
〒616-0004　京都府京都市西京区嵐山中尾下町20－15　太田方
Tel/Fax　075－862－2556（留守電）
E-mail　recom@jca.apc.org
URL　http://www.jca.apc.org/recom/